

今年最後の

冴月

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

今年最後の、P o p p i n ' P a r t y

目次

今年最後の

1

今年最後の

「……みんなおはよう！」

2020年の12月31日。世間的に言われる“大晦日”に、香澄は蔵にやってきた。

1年前と何ら変わらない様子で蔵の扉を叩き、ちよつと忙しく階段をおりてくる音に、たえ、りみ、有咲、沙綾は安心感さえ覚えていたのは秘密だ。

「おはよう香澄。……はい、今日の差し入れだよ」

「ありがとうさーや！ ……ん〜！ 今日もさーやんちのパンは美味しい！」

今日香澄が選んだのは、メロンパンだった。中になにか入っている訳でもないシンプルなメロンパンだが、最高に美味しい。香澄は、貰った直後、あつという間にメロンパンを食べきっていた。

「ふふっ、ありがと、香澄」

香澄の褒め言葉を、沙綾が楽しそうに受けとり笑う。ほのぼのとした光景だったが、有咲からのツッコミがそこに突き刺さってくる。

「……って、おい！ ……いつの間に食べてたんだよ！」

「ええー、食べてないの有咲だけだよ！」

「なっ！ りみとおたえ、いつの間に……」

驚いている有咲を他所に、うさぎのしっぽパンとチョココロネを頬張る2人。その光景を嬉しそうに眺めながら、沙綾もベールを一口口にしていた。

先にパンを食べ終わっていた香澄は、四人がパンを食べている光景を眺めていた。

各々が雑談しながら、幸せそうに笑い合っている。その何気ない日常が、なんとも言い難い星の鼓動感して……。

「あっ！」

香澄が唐突に声を上げる。

こういう時、香澄が急に声を上げる時は、何かしらイベント事が起きるといふ事が決まっている。現に、Poppin' Partyの面々がなにかしら行動を起こすときというのは、香澄がきっかけのことが多いのだ。

「どうしたの、香澄ちゃん？」

りみが、慣れた様子で香澄に聞いてきた。

香澄は、それに若干興奮気味に答える。

「りみりん！ ”今年最後”なんだよ！」

「……えと、今年最後？」

「うん！ 2020年も、今日で最後でしょ？ だから、今日やることすることぜーんぶ今年最後なんだよ！」

心の底から楽しそうに言う。香澄の思いつきの意図がわかったのか、たえも香澄と同じように声を上げた。

「そっか！ 私がオツちゃんともフモフするの、今日で今年最後なんだ！」

「そうなんだよ！ ギター弾くのも、パン食べるのも、ぜーんぶ全部！」

目をキラキラさせながら、香澄と頷き合うたえ。一緒にはしやぎ合っているその二人を見て、有咲はため息をついた。

「それ、何やるのも今日で最後になるじゃねーか」

「うん、そうだねえ。みんなが集まるの、今年最後ってことになるのかな」

沙綾が、ちよつとだけ寂しそうに言う。明日も明後日も、初詣などで会う予定のポピパだったが、”最後”ということもあり、少しだけ寂しさを感じていた。

「……だったらさ！ ゼーんぶやっちゃおうよ！」

「全部って？」

りみが不思議そうに首を傾げる。

「ぜんぶはぜんぶだよー！」

「だから、全部ってなんだよ！」

「わっ、今年最後の有咲のツッコミだー」

「う、うるせー!」

有咲が、ワナワナとしながらたえにツッコミを入れる。

後ろでにこにここと笑っている沙綾が、笑みを浮かべたままフォローを入れた。

「ふふっ。香澄、全部って本当に全部なの?」

「うん! ご飯食べたり、お話したり! ライブしたり……あつ! 有咲のうちでお泊まりとかも!」

「いやいや。ご飯とかはまだしも、ライブとか泊まりは出来ないだろ……」

有咲が溜息をついた。しかし、「全部をやる」ということ自体は、全くもって否定していなかった。

「んー、どうすればいいかな。やり残しはしたくないし……」

5人で、「今年最後に全部をやる」ことについて考える。あれをやった方がいいだとか、これをやった方がいいだとか。時にお菓子を食べながら、ジュースを飲みながら香澄達はガールズトークを続けていく。

そんな時、りみから意見が挙がった。

「……演奏、したらどうかかな?」

「演奏? 確かに、全部やる」ことには、入ってるけど……」

沙綾が首を傾げる。りみは、4人に向き直り続けた。

「えつと。私のオリジナル曲って、何かあった時とか楽しいことがあった時とかに作ってるでしょ？ だから、ポピパの全部ってこの歌達になるんじゃないかな」

りみが微笑む。ポピパの4人もその言葉を聞いて、今までの“音楽”^{キズナ}を思い出していた。

大好きな歌、約束の歌、永遠の歌。大切な歌、はじまりの歌、青春のうた。それから収束し、同調し、内なる力を秘めて六芒星のように輝いていく。

「……それ、最高だよりみりん！」

うつきやあ！ と言った感じに弾けつつ、香澄はりみに抱きつく。りみが、恥ずかしそうにしつつも、香澄を優しく受け止める。

「……うん！ 私も、本気で向き合ってきた歌達を、最後にやりたいな」

「だね。……あ、どうせなら作った順にやっていこうよ。それを写真とか動画に撮っておいたりするのはどうかな！」

「いいねいいね！ 全部悔いがないようにやつちやおう！」

香澄と、沙綾と、りみとたえがノリノリだ。そんな4人が、また声を出していない有咲の方を見る。

「え、全部やるんだろ？ ちょっと忘れてるのもあるから、楽譜出さないと……」

有咲が背を向けて、近くの棚をガサゴソと探し始めた。そんな自然な有咲の態度に、香澄が「素直になつたなあ……」などと思つたのは秘密である。

「よし！　じゃあみんな！　準備はいい？」

ランダスターを傍らに携え、香澄は4人を見る。

私と一緒に音楽キズナを奏でてくれる、最高の仲間。溢れる想いと、切なさと、夢の先までいつしよに進んでいける最高の仲間。

それは、“今年最後”なんて関係ない。今日も、明日も明後日も。1年後も10年後も、何時まで続いていく。

「よし、いくよ！　”Yes！　Bang！　Dream！”」

Deliver the star beat！

意志と勇気をその胸に、Poppin' Partyは何時までも歩いていく。